

川崎医科大学高齢者医療センター 高齢者総合診療科

角谷 裕之 杉本 研

(日老医誌 2024 ; 61 : 492-494)

高齢者を治し支える医療を目指して

川崎医科大学高齢者医療センターは、超高齢社会を迎えるにあたって地域包括ケアシステムを支える多職種の医療福祉の専門職を育てるというコンセプトを持った全国で初めての大学病院です。川崎医科大学附属病院、川崎医科大学総合医療センターに続く川崎医科大学3番目の附属病院として2023年9月1日に岡山県岡山市の旧川崎病院の跡地に開院しました。急性期疾患治療後の受入れや、在宅療養中の状態悪化時の受入れに対応する地域包括ケア病棟など102床の病床数を有し、高齢者総合診療、在宅支援等を通じて地域の医療福祉の充実に貢献することを病院の基本理念として掲げています(図1)。

川崎医科大学高齢者医療センターの特徴

①高齢者総合診療科として、老年症候群外来ともの忘れ外来を設置

様々な心身機能の低下が生じ、複数の疾患を併せ持つ「老年症候群」に対して、老年医学の専門医、糖尿病専門医、腎臓内科専門医、循環器内科専門医を中心としたチーム医療で総合的かつ全人的に診療をすすめています。

また、認知症にはアルツハイマー病、レビー小体型認知症、血管性認知症など複数の認知症疾患があり、それぞれ症状も異なり治療法も異なります。もの忘れ外来では、認知症専門医が認知症や軽度認知障害の患者さんを対象に、鑑別診断およびそれに基づく初期対応やかかりつけ医との連携等を図っています。

②地域包括ケア病棟の設置

現在、102床の半数を地域包括ケア病棟として運営しています。同病棟では、転倒による骨折や術後(消化器疾患、整形外科疾患など)の患者さん、心不全・肺炎等の急性期治療で症状が安定した患者さんに対して、医師・看護師などを中心とした多職種によるチーム医療を提供し、在宅復帰に向けた支援を行っています。また、在宅療養中の患者さんや、ご家族の休養を目的としたレスパイト入院の相談にも対応しています。

③在宅療養支援センターの設置

在宅療養支援センターは、2016年4月に川崎医科大学総合医療センターの診療支援部門である患者診療支援センターの一機能として生まれ、入院患者さんの在宅復帰支援を行っていました。その後、訪問看護ステーションかわさきを2019年5月に開所し、2019年11月には居宅介護支援事業所かわさきを、そして、2020年11月にはかわさき訪問介護ステーションを開所しました。川崎医科大学高齢者医療センター開院と同時に部署を移動させ、医療ニーズの高い利用者に対して専門性を持った訪問看護、質の高い訪問介護を実践し、個々の患者さんに最適なケアプランを作成できるように、また、それを実現できる人材を育成することを2本の柱として、地域の安心と発展に貢献しています。

④フレイルセンターの設置

当院では、運動によるフレイル予防・健康維持サービスを提供しています。森の中にいるような木々に囲まれた開放的なエリアで、加齢に伴う体力の低下を予防する運動プログラムを実践しています。健康運動指導士によ

川崎医科大学高齢者医療センター 高齢者総合診療科

連絡責任者: 角谷裕之 川崎医科大学高齢者医療センター 高齢者総合診療科 [〒700-0821 岡山県岡山市北区中山下二丁目1番80号]

e-mail: kadoya-hiro@med.kawasaki-m.ac.jp

doi: 10.3143/geriatrics.61.492

高齢者を治し支える包括的な医療福祉

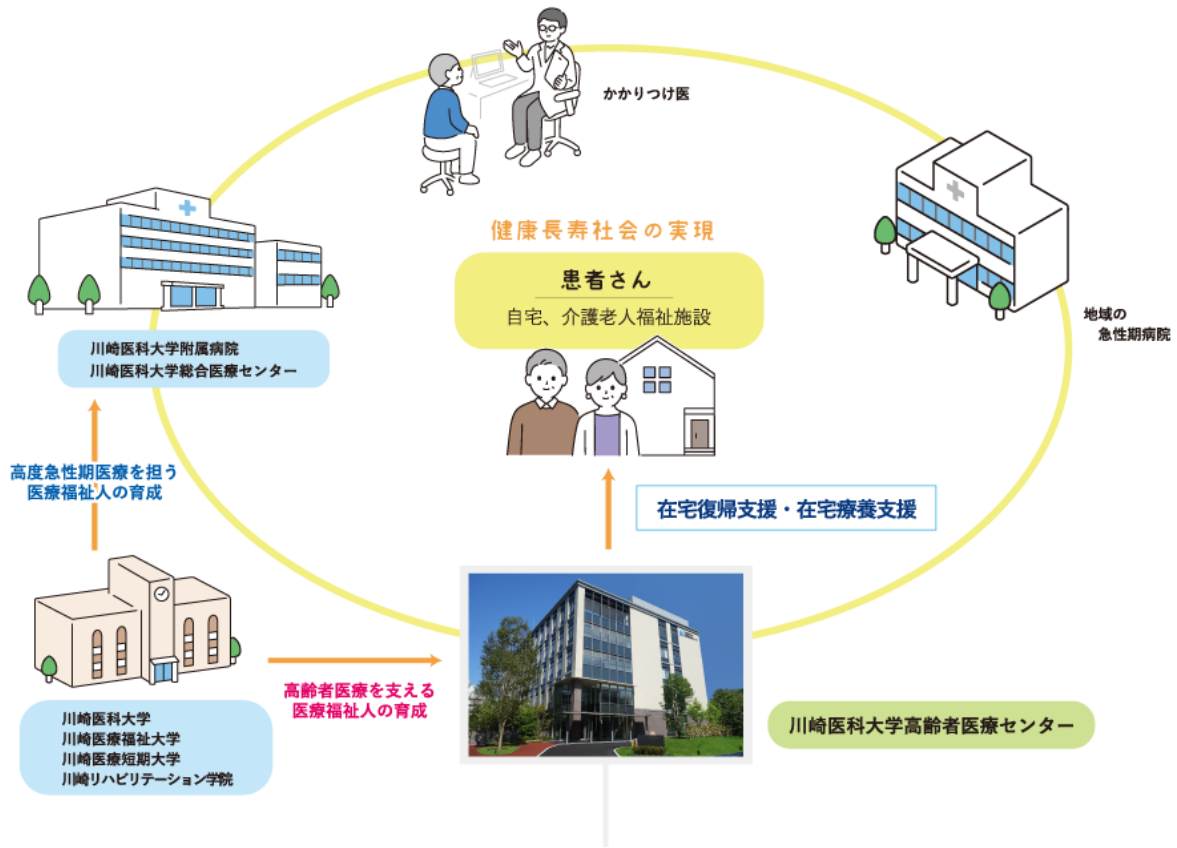


図 1



写真 1 多職種連携カンファレンスの風景

とにより、健康寿命延伸への意識を高めることに寄与するだけではなく、新たなフレイル患者の発掘にも貢献しうること

多職種連携カンファレンスの実施

当院では、毎週月曜日に「多職種連携カンファレンス」を実践しています（写真1）。その意義は、ケアの質の向上、医療者間のコミュニケーションの強化、教育的側面になります。医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、臨床心理士、リハビリテーションの療法士、健康運動指導士、ソーシャルワーカー、介護福祉士など様々なスタッフが専門的立場から意見を述べ、患者の病状や治療方針を総合的に評価し、最適な治療計画を立案しています。高齢者診療においては医学的な問題以外にも、個人の嗜

る個別もしくは集団プログラムを選ぶことが可能であり開院後、予約数も増えてきています。また、毎年フレイルの日（2月1日）には、近隣住民を対象にフレイルのことを理解し、それを予防する方法を体感してもらうこ

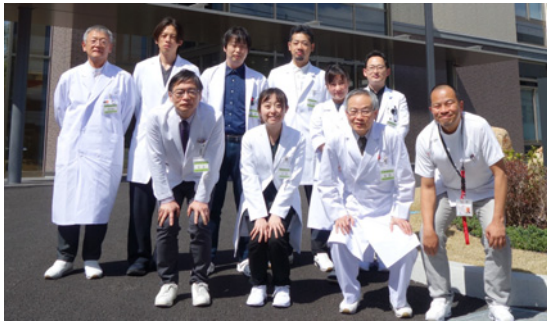


写真2 川崎医科大学高齢者医療センター高齢者総合診療科のスタッフ一同

好や家庭の事情など多種多様な問題が複雑に絡みあっているケースが多いため、多職種連携カンファレンスがその解決の糸口となります。多職種の視点からのアプローチが、老年医学的見地に基づいた質の高い「治し支える医療」を提供するための基盤となっています。

また、川崎医科大学医学部では、4学年時に老年医学の講義を行っています。同講義の中で、臓器別疾患を有する高齢者を「人」として捉え、その全体を診るという視点に基づき、個人が人生を全うすることを医学的な立場から支持し、それを多職種連携により実践するために必要な知識を得て理解し、臨床実習につなげることを目的とした教育を実践しています。同講義を受けた学生が実習生として多職種連携カンファレンスに参加し、高齢者医療の在り方を学ぶ機会を設けています。

医療・医療福祉の専門職を育成する教育の場を提供

当院では、川崎医科大学・川崎医療福祉大学・川崎医療短期大学の学生が実習生として臨床現場に参画する期間を設けています。医学部の5年生は、総合老年医学および認知症学の両科を担当学生全員で実習しています。診療参加型臨床実習（クリニカル・クラークシップ）を

基本理念としており、学生は老年医学の診療チームの一員として診療に参加し、診療業務を分担しながら医学知識・思考法・技能・態度を学び、指導医のもとでチーム医療と高齢者診療の実際を経験しています。また、高齢者に多い、認知症を中心とした神経系疾患、慢性呼吸器疾患、骨粗鬆症、骨折後のリハビリテーション学、慢性腎臓病・糖尿病などの生活習慣病を高齢者に準じた視点より経験することが可能となっています。そして何よりも実習期間中に「老年医学」に興味を抱かせることが重要であり、他病院ではなかなか体験することができない「老年医学」の根幹を学ぶ機会を提供できるように心がけています。

新たなエビデンス発信を目指して

当院は開院後、全入院患者の基礎疾患(サルコペニア・フレイルの有無も含む)、高齢者総合機能評価、既往歴、身体所見、検査値などをデータベース化し保有しています。これら後ろ向き研究のデータを解析することで、介入研究や前向き臨床研究につなげていき、多施設共同研究へ拡充させることで、新たなエビデンス発信に貢献したいと考えています。

さらに臨床研究のみならず、基礎研究にも力を入れています。具体的には、遺伝子可変動物を使用して、マイオスタチンの「筋腎連関」を介した腎臓病進展の分子機序解明、慢性炎症を介したサルコペニアと急性腎障害の関連性などについて精力的に研究を進めています。

さいごに

最新の知見に基づいた高齢者医療の実際、そして多職種の医療福祉の専門職を育てる教育の実際、新たな臨床的・基礎的なエビデンスを発信する研究の実際を目指し、私共の病院が、老年医学の発展に貢献できればと思っています（写真2）。